

---

# エストディレツィオーネ

ミヤカヒト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エストディレツイオーネ

### 【Nコード】

N7764J

### 【作者名】

ミヤ カヒト

### 【あらすじ】

ある日、幻想郷ごと異世界へと飛ばされた聖。

世界の存続を賭け、対立する二つの組織。さらに中立を保ち、世界の行く末を見定める者たち。

魔法世界ヴァルハラで起きる、世界を巡る果てしなき戦い。

そして物語は、世界の終末の戦争<ラグナロク>へと加速する！！

## 魔法世界の冒険譚

### 第1話 魔法世界の冒険譚

…うん……

ここはどこだ…？

何故かボーツとする。わたし一体今まで何してたのかしら…

よし、まずは順に考えていこう

恐らくわたしはさつかまで気を失ってた(笑)

記憶喪失とかベタな展開もあるかもしれないから確認しておこう

わたしの名は？

…聖白蓮。ピッチピチの三十ピー歳…って何言わすのよ！まだまだ乙女よ！！

…って、なんだが体がいつもの感じと違うわね。そう思って私はまずその場で立ち上がった。なんだかいつもより景色が大きく見える。それにいつもならもっと遠くを見てたような…

そこでハツとなり自分の身体をくまなく調べてみる。

…もしかしてわたし…

縮んでる？

完璧に縮んでる。手も、足もいつもより小さい。鏡を見ていないから確証は無いけれど、恐らく顔も小振りになっている。

全体の雰囲気からして16〜17歳ぐらいだろうか。しかし大分若返ったことになる。

…いや、大分じゃないわ。大丈夫大丈夫、まだまだわたしは若い…  
大丈夫まだイケる…

それにしても何故急に身体が縮んだのかしら？

手も、足も、背も縮んで…顔も小振りになってるし髪も少し短くなってるみたい。前までは腰の辺りまで伸ばしてたけど今は肩甲骨の辺りかしら。

…それでも胸だけが小さくなってないのはなんか逆にハラがたつわ…  
…

とりあえず一通り考えてみて、身体が縮んだこと以外はなにも問題は無さそうに思う。

…まあ、この世界がどうなってるのかは別だけど…

前まで住んでいた幻想郷はこんな殺伐とした所じゃ無かった。誰かの能力のせいかしら？

…能力？

そうだ！わたし、能力はちゃんと使えるのだろうか？

魔法が使えなかったら何かと不便……って、あら？なにかしら？急に暗くなって…

そして空を見上げると、そこには大きく牙のびっしりと並んだ口を開けた、狼男のような生き物がわたしを見下ろしていた。

ちなみに背丈はわたしの約3倍、その鋭い爪を湛えた力強そうな腕でひとなぎされたら、わたしなんてちり紙のように簡単に引き裂かれてしまうだろう。

…いや、わたしいくらなんでもちり紙ほど弱くないわね。あぶらとり紙くらいのタフさはあるわよ。

いざ狼男がその腕を振るい、わたしがそれを紙一重で避けた時、初めて脳裏にこんな言葉が浮かんだ。

危険

…うん。わかってるわよね。

案外わたしの脳のスーパーコンピュータは旧式なのかしら？ 度重なる不可解な状況に処理落ちをしてるみたい。

とにかく、この狼男と闘うにしても逃げるしても重要なのはただ一つ。

魔法の使用が可か不可か

意識の集中。今から、処理落ちした脳には引っ込んでもらっていても構わない。

感覚の世界。わたしの魔法は世間一般的なびびるびびるびびるびびるびととかテクマクマヤコンの類いでは無い。

ただ純粹に己の肉体を強化する魔法。

「マージナルドーピング」

全身が一瞬だけ浮遊感に包まれる。魔法が成功した証だ。魔法の使用の可か不可、答えは可だったようだ。もう一度来る狼男の強力な剛腕の一撃。しかし、今度はそれを真っ向から受け止めに行く。

力と力のぶつかり合い。…しかし、魔法で強化したわたしには、いかにもっじゃもっじゃのフサフサ男でも腕力では勝てるわけがない。

フサフサ男の一撃を片手で受け止め、空いた右手でフサフサ男の脇腹を打ち抜く。

そして、一度撃った拳を軽く引っ込め、もう一度同じ箇所を正確に打ち抜く。するとどんなに全身を剛毛で覆っているフサフサ面白パ

「ティー男でも、内部のダメージによって倒れざるをえなくなる。ドスンと地響きをたて、フサフサ面白パーティー男全15巻はその場で倒れこんだ。魔装したわたしの相手は熊公…いや、犬っころには荷が重すぎたよ。うだ。」

ふふん、と少し鼻を鳴らしちゃったりなんかして少し悦に入ったり自分に酔いしれているところにいきなり怒声が投げつけられた。

「魔法でトドメをさせ!!馬鹿者!!」

「なっ…!?!」

その声が響いたと思った瞬間、倒れていた前略男が炎に包まれた。呆気にとられているものの数秒で全略は灰塵となって跡形もなく消えてしまった。

すると今度はどこからともなくわたしの目の前に一人の少女が現れた。

「お、お前はっ…!!」

「……?」

「誰だぁーっ!!…!!」

わたしの旅はこうやって始まったようだ。

じゅじゅ

## 謎の少女は知った顔？

第2話 謎の少女は知った顔？

わたしの前に現れたのは妖艶な雰囲気を湛えた緑髪の少女だった。少女はこちらに歩み寄ってきて大きな瞳でわたしを睨み付けた。見た目こそ少女だがその威圧感は凄まじいものだ。

「お前…魔法使いか？」

「へ？そうよ、それがどうかしたの？」

「魔法使いのくせに魔物へのトドメのさしかたも知らないとはな」

緑髪の少女は口を開くなりいきなりわたしへの悪態をつき、そっぽを向いてしまった。緑髪の少女のいう魔物とはさっきの狼男のことだろうか？緑髪の少女はトドメがどうこう言ってたけど…もしかして最後の炎はこの緑髪の少女が出したってことかしら。……緑髪の少女？そうだまづは名前を聞かないと。

「わたしは聖白蓮。あなたは？」

「私の名は六文字雛<sup>ろくもたんじ</sup>。遊撃騎士団所属、三番隊隊員だ」

「ひ、ひな？」

雛と名乗られて今更ながら気がついた。服装も違うしいつもと髪の手ねかたも違うが、この少女は幻想郷に住んでいた厄神、鍵山雛と瓜二つだ。苗字こそ違うものの、雛という名前は同じわけだしなにより顔が一緒なのだから赤の他人というわけでは無さそうだが…

「…なんだ、私の顔になにかついているのか？」

「え？あゝ…鼻、かしら」

「フン、誰にでもついている」

しかし彼女が雛だとしても、不可解な点はまだ山積みだ。とにかく今は情報を得ることが最重要だろう。とりあえず雛は敵では無さそうだし、色々と教えてもらった方がよさそうだ。

「あの…雛ちゃん？」

「ちゃんはいらん、雛でいい」

「ねえ、雛？わたしもその遊撃騎士団？とやらに入団したいんだけど、本部的な所ってどこにあるのかしら」

「お前が遊撃騎士団に…？お前のような無知な輩には遊撃騎士団に入る権利など無いな」

「じゃあ雛、わたしに色々教えてよ」

「……ふむ、まあいいだろう」

遊撃騎士団とやらに入団することは拒否られてしまったが、雛から情報入手することは出来そうだ。まずは何から聞こうかと考えていると、雛は踵を返してさっさと歩いていつてしまった。わたしは雛を慌てて追いかけて横に並び、雛に問いかける。

「ちょ、ちょっと！どこ行くの雛？」

「お前は馬鹿か？こんな荒野のど真ん中で腰を落ち着かせて話が出ると思つか？まずは最寄りの町まで戻るんだ」

「あ…ああなるほど。っていつかここ荒野のど真ん中だったのね」

「何を寝ぼけたことを言っている…自分が何処にいるかも把握していないのかお前は」

「はい、まったく」

「…とすると…一時的な記憶障害か？まあいい、町まで戻れば私達遊撃騎士団の施設もある。そこに医者もいるからそこで見てもらうといい」

「え？いや…そういうあれじゃ…」

「グズグズするな。さっさと町に戻るぞ」

「はい…わかったわよ…」

この雛…いつもの雛と違って大分性格がキツいわ。なんとなく軍人の匂いがするし。  
まあとにかく町まで戻って、この世界のことを調べることが先決みたいね。

つづく

## 荒野の主の襲撃

### 第3話 荒野の主の襲撃

…広い。凄まじく広い。

雛と出会い、最寄りの町まで戻るということになり歩き始めてはや2時間。ただただ目の前には地平線が広がるだけで、一向に町らしきものは見えてこない。

「ねえ〜雛〜…」

「なんだ、気だるい声を出すな。こっちまで気が滅入る」

「いつになったら町に着くのよ」

「…あと1時間も歩けば見えてくる。我慢することだ」

「うへえ〜…」

あと1時間もこの殺風景な景色を眺めていなきゃならないと思うと落ち込んでくる。ついでに言うと大分お腹も減ったし咽も渴いた。どこぞに飛ばされたんならもうちょっと気のきいた所にして欲しかったわ。

太陽はガンガン照りつけるし、結構強めの風も吹いている。まあ簡単に言っただけかなり体力を消耗するには整いまくりの環境だ。そんな中、雛は顔色一つ変えずにさっさと先に先に進んでいく。

…この娘サイボーグか何かかしら…

ポーツとする頭でそんなことを考えていると、不意に地面が揺れたような気がした。地震かしら？

そう思っただけ足を止めた途端、今度は地響きをたてるような大きな揺れが辺りいつたいを襲った。立っているのもやっとの程の揺れ中、雛は涼しい顔で戦闘体勢を取っていた。

…やっぱりこの娘サイボーグじゃないかしら…

「フン、わざわざそこから出てきてくれるとはな…もう一度このエリアに足を運ぶ手間が省けてなによりだ」

「雛、どういうこと？」

「私がこのエリアに来た理由は、ある魔物を討伐するのが仕事だからだ。…そして、この魔物が…その対象だ」

すると雛の視線の先の地面が一気に盛り上がり、砂を撒き散らしながら巨大なトカゲのような生物がその姿を現した。

その体長は軽く10mは越えており、大きな口にはびっしりと鋭い牙、太く頑丈そうな四肢の先にはこれまた鋭い爪が顔を覗かせていた。

「サンドドラゴン、ここら一帯の主だ。危険度指数は32だ」

「いや32とか言われてもどの程度なのかさっぱり」

「…さっきお前が闘ったワーウルフが危険度指数5だ」

「へえ…ってメチャクチャ強いっばいじゃない！」

「当たり前だ。でなければ我々遊撃騎士団が駆り出される必要など無いからな」

「ほお〜」

「まあせっかく魔法使いがもう一人いるんだ、お前も討伐に強力しろ」

「うへえ〜まあいいけど」

「お前の魔法は？」

「わたしの魔法は肉体強化魔法よ」

「そうか。ふむ…よし、では少しの間奴の気を引き付けておいてくれ。私の魔法は発動までに時間がかかる。私の魔法が完成したらお前は補助にまわってくれ」

「了解！…んじゃ、行きますか！！」

UNU

## 遊撃騎士団の実力

### 第4話 遊撃騎士団の実力

このサンドドラゴンとやらの危険度指数は32だと雖は言っていた。さっき倒した狼男の約6倍だから…あの強靱そうな脚の一撃も狼男の約6倍の威力ということになる。…さすがに受け止めるのは無理だろう。秘技ヒジリン脳内会議を終え、雖の魔法が完成するまで逃げ回りながら時間を稼ぐ作戦に落ち着いた。本来私の使う肉体強化魔法は、主に体格に激しい差が無い相手に相性のいい魔法だ、それをいきなりこんな大物を相手にしろと言われても…攻撃も通じないだろうし防御も破られるだろう。必然的に私の選択肢は逃げるということになってしまう。

「マージナルドーピング！」

しかし、このトカゲの相手を引き受けたからにはきっちりと相手をさせてもらう。それがわたしのポリシーだから。

……違う、ポリシーだった。

マージナルドーピングは身体能力を劇的に跳ね上げる魔法、対狼男の時のように、腕力もさることながら脚力も凄まじく強化される。

爆発的な脚力でサンドドラゴンの足下に潜り込み、渾身の一撃をサンドドラゴンの右前足に叩きつける。…が、サンドドラゴンはびくともしない。注意を引き付けるのが目的だから…効かなくてもいいっちゃいいんだけど…フルパワーで殴ったのに（推定）ノーダメージはさすがに落ち込むわね。

サンドドラゴンが脚をバタバタさせて、自分の脚を殴った元凶を探し出し、わたしをその目で捉えた。これで雛から注意をそらすことは出来ただろうけど…デカすぎるわ、こいつ。こんなのをまともに相手にしたら命が幾つあっても足りないわ。一撃でも貰おうものなら致命傷ね。

「一応言っておくが…サンドドラゴンに打撃はほとんど無効化されるぞ」

「ううっおっ！！それ最初に言ってよー！！」

…まあ、それを教えてもらってたとしても打撃しか出来ないんだけどね。

とにかくヒット&アウェイを繰り返しながら時間をかせいでいく。こちらの攻撃を当てて注意を引き付けることより、サンドドラゴンの攻撃を避けることで必死だ。そうこうしている内にマージナルドーピングの効力も切れ始めてきてしまった。もってあと3分ほどだろう。

「雛…！あとどのくらいかかる！？」

「…よし、発動準備、完了だ」

「ナイスタイミング!!」

「離れている」

「言われなくてもっ!」

残った魔力を使ってサンドドラゴンと距離を十分に空ける。それをサンドドラゴンが目で追ってくるが、強大な力を感じ取り、その発生源の方に首をふった。

もちろん、サンドドラゴンの視線の先には…深緑の焰ほむじを身に纏まとう雛の姿があった。

「我が名は雛、六文字雛ろくもんじ。遊撃騎士団員であり、死霊使い（ネクロマンサー）の二つ名を持つ者」

「死霊使い（ネクロマンサー）…?」

「私の魔法の名は人魂ひとたま召喚魔法、奈落より呼び出した業火によって骨まで焼き尽くされるがいい…!!」

雛がそう言うと、その身に纏まとっていた4つの人魂がサンドドラゴンの四肢に貼り付き、その瞬間、四肢から伝うように身体を、そしてその長い尾と大きな頭を深緑の業火で覆い尽くしてしまった。

そして雛が手をかざし、振り払う動作をするとサンドドラゴンを覆っていた焰ほむじは消え去り、残ったのは同じ質量の灰塵かいじんだけだった…

「討伐完了……」

「す、すい……」

うう

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7764j/>

---

エストディレツィオーネ

2010年10月9日03時05分発行